The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ボードレールとパスカル : 信仰と想像力に関して
Author(s)	廣田, 大地
Citation	Gallia. 2016, 55, p. 45-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61935
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ボードレールとパスカル―信仰と想像力に関して[1)]

廣田　大地

はじめに

ボードレールの『悪の花』とパスカルの『パンセ』の間には、そのジャンルの違いにもかかわらず、少なからぬ共通点がある。それは主に、人間存在の不完全性をめぐる哲学的な問いに関するものであり、具体例を挙げるなら「永遠 éternité」「無限 infini」「有限 fini」「時間 temps」「空間 espace」「深淵 gouffre」「虚無 néant」「孤独 solitude」「罪 péché」といった単語が、両作品に共通して繰り返し現れていることが指摘できる[2)]。両者の比較研究を行う際、そのような共通の語彙を手掛かりに、主題上の類縁性を論じていく方法もあるが、一方で、そのような主題はボードレールとパスカルの共通点に留まらず、大多数の作家における本質的な主題であると言ってしまうことも可能だろう[3)]。頁数にも限りがある本論では、あくまでも実証的に明らかにされているボードレールによるパスカルについての言及を一つずつ精査する中で、この19世紀フランスを代表する詩人の思想において『パンセ』の著者がどのような位置を占めていたのかを具体的に検証したい。そのために本論が基盤とするのは1989年にフィリップ・セリエが発表した「ボードレールとパスカルについての一研究」という論文である[4)]。パスカル研究の大家によるこの論文は、12ページというごく短い分量ながらも、この領域での現時点における最も重要な先行研究であると評価できるが、その理由として、この論文が果たした次の2点の貢献がある。第1に、ボードレールが生きた19世紀前半におけるフランス社会でのパスカル受容のあり方を、豊富な文献学的知識をもとに提示した点。第2に、信仰の問題をめぐる2人の特異性を、両者の比較から浮き彫りにした点。そのような重要性にも関わらず、セリエ論文はこれまで日

1）本論において、ボードレールとパスカルの著作からの引用は次の版を用いる。
・ボードレールの著作：Charles Baudelaire, *Œuvres complètes*, 2 tomes, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1975 et 1976 [Sigles : *OC* I et *OC* II]. Charles Baudelaire, *Correspondance*, 2 tomes, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1973 [Sigles : *CPl* I et *CPl* II].
・パスカルの著作：Blaise Pascal, *Les Provinciales, Pensées et opuscules divers*, textes édités par G. Ferreyrolles et Ph. Sellier, Librairie Générale Française, «La Pochethèque», 2004.（『パンセ』からの引用の際には「*Pensées*, S168-L136」等、セリエ版・ラフュマ版での断章番号をそれぞれ記号SとLに続けて記す。）

2）同様の主題は『悪の花』以外にも散文詩集『パリの憂鬱』や『内面の日記』にも顕著に現れている。『内面の日記』は、その形式に於いても『パンセ』との類似性が指摘できるだろう。

3）先行研究の1つであるジャン・デュブレーの博士論文では、まさにこの問題が正面から扱われている。（Jean Dubray, *Pascal et Baudelaire*, Classiques Garnier, 2011.）

4）Philippe Sellier, «Pour un Baudelaire et Pascal», in *Les Fleurs du Mal : L'intériorité de la forme*, Société des études romantique, SEDES, 1989, pp. 5-16.

本のボードレール・パスカル両作家の研究者からあまり注目されてこなかったように思われる。そのため、本論では実際にセリエ論文を必要に応じて引用・和訳していくことで、その重要な指摘の数々を紹介し、その上で特にボードレールの「想像力」論構築におけるパスカルの役割に関して、新たな指摘を付け加えることを最終的な目的としたい。

1. 19 世紀におけるパスカル受容

セリエによれば、ボードレールが生きた時代は、まさしくパスカル研究が大きな盛り上がりを見せていた時代であった。

> ボードレールの創作時期全体が、パスカル研究に関するまさしく一つの熱狂によって伴われていた。1779 年より再版が繰り返されていた、ボシュ版による『パンセ』には、キリスト教の擁護に、パスカルの他のあらゆる種類の作品が混ぜ合わされており、あきらかに改ざんされたテキストが提供されていた。1842 年になると、ヴィクトル・クザンが『パンセ』の正しいテキストを確立するべく呼びかけを行う。1844 年からはプロスペル・フォジェールがこの要望に応え、原本をもとにして、『パンセ・断片と手紙』を出版する。1852 年には、著名なアヴェ版が刊行される。これは、ボシュ版の配列をほぼ保ったまま、フォジェール版のテキストを採録したものである。様々な証拠により推測すると、ボードレールはまずボシュによる版を所有し、続いて、パスカルのテキストそのものを持つことを望み、アヴェ版を所有したと思われる。また、サント＝ブーヴの愛読者であった詩人が興味を持たずにはいられなかった『ポール・ロワイヤル』は、1840 年から 1859 年にわたり刊行され、その多くの部分がパスカルに当てられていた [5)]。

上記のように概観された 19 世紀におけるパスカル研究の盛り上がりと、1821 年に生まれ 1867 年に死去したボードレールの詩人としての活動は、まさしく時期的に一致していると言えるだろう。また、ボードレールが『パンセ』の複数の版を所有していたという点に関しては、セリエが言う「様々な証拠」というのが具体的に提示されていないため、その判断の妥当性を今後改めて確認する必要があるものの、その判断を暫定的に受け入れるのであれば、サント＝ブーヴのようにパ

5）«Toute la période créatrice de Baudelaire a été accompagnée par une véritable effervescence des études pascaliennes. Depuis 1779 s'étaient multipliées les reprises de l'édition Bossut des *Pensées*, qui mêlait à l'apologie toutes sortes d'autres œuvres de Pascal, et fournissait un texte sensiblement altéré. En 1842, Victor Cousin lance un appel à l'établissement du texte authentique des *Pensées*. Dès 1844 Prosper Faugère répond à ce vœu et publie, d'après les originaux, les *Pensées, fragments et lettres*. En 1852 paraît la célèbre édition Havet : tout en conservant à peu près l'ordre de Bossut, elle reprend le texte de Faugère. Divers indices suggèrent que Baudelaire a possédé d'abord une édition selon Bossut, puis — souhaitant disposer du texte même de Pascal — l'édition Havet. D'autre part, admirateur de Sainte-Beuve, le poète ne pouvait manquer de s'intéresser au *Port-Royal*, dont la publication s'étend de 1840 à 1859 et dont une ample partie est réservée à Pascal.»（Sellier, *op. cit.*, p. 6.）

スカルについての造詣が深い作家とも交流していたことも相まって、詩人のパスカルに対する視点はけっして一面的なものではなかったと判断できる。

そのような背景のもと、ボードレールはその著作の中で何度もパスカルについて言及しているのだが、中でも最も早い時期にあたるのが、1852 年に発表された「異教徒派」と題する記事である [6)]。ここではパスカルの名が直接記されているわけではないものの、先行研究によりその関連性がすでに指摘されている。冒頭部を要約すると、1848 年の 2 月革命を記念する宴において、一人の青年が牧神パンを讃えて演説を行い、それを聞いた語り手が、以前「牧神パンは死せり」との言葉が発せられたはずなのに、牧神パンは生きていたのかと驚くという場面になる [7)]。一般的な解釈では、牧神に祝杯を捧げた青年が象徴するのが、古代ギリシャ神話の世界をフランス詩に甦らせようとした高踏派の立場であり、それに対置する旧来のキリスト教の立場が、かつて語り手が又聞きしたという「牧神パンは死せり」という言葉に象徴されている。この言葉は、キリスト教護教論のために書かれた『パンセ』において、古代ギリシャ・ローマの神々が滅び、キリスト教が栄えることを示すものであった [8)]。したがって、ボードレールはパスカルの言葉を借用しつつも、むしろその意味するところを否定していることになる。このようにボードレールにおけるパスカルへの言及は、完全な同意や賛同としてではなく、むしろ批判的に用いることで、パスカルとは異なる自身の意見を明確にする上で用いられることが少なくない。

その次に見られるパスカルへの言及は 3 年後の 1855 年。啓蒙主義活動やフランス革命の舞台にもなってきたヌイイ城を論じた歴史書について、ボードレールが執筆した紹介文の中にパスカルの名前が記されているが、ここでは詳細は省略する [9)]。

2. 二人の孤独者と 1862 年

ボードレールによるパスカルへの直接的な言及は、興味深いことに、上記の 2 点を除けば、残りは全て 1859 年から 1862 年という詩人の生涯における芸術活動の円熟期に集中している。とりわけ 1862 年という年は、セリエ曰く、ボードレールにとっての「パスカル年」とでも言うべきほどに、多数の作品においてパスカルに対する一種のオマージュが見受けられるという。

その一つとして、たとえば散文詩「孤独」が挙げられる。この詩篇が 1855 年に初めて発表されたときにはパスカルへの言及がなかったものの、1862 年の改訂版において、次の末尾が付け加えられる。

我々の不幸のほとんど全ては、我々が自分の部屋に留まるすべを知らなかっ

6）«L'Ecole païenne», *OC* II, pp. 44-49.
7）Cf. Dubray, *op. cit.*, pp. 348-349.
8）«Prophéties. Le grand Pan est mort.»（*Pensées*, S375-L695.）厳密に言えば、もともとプルタルコスによって紹介された逸話を、パスカルがあらためて『パンセ』の中で言及している。
9）[Compte rendu de l'*Histoire de Neuilly* de l'Abbé Bellanger], *OC* II, p. 55.

たことに起因している。と言ったのはもう一人の賢者であるパスカルであったと思うが、そのようにして彼は、瞑想の小部屋の中において、運動や、もしも私の世紀の美しい言葉で言うならば友愛の、とでも呼ぶべき売春のなかに幸福を探し求めるあれらすべての狂人たちを想起したのであった[10]。

ここで言うパスカルの言葉とは、『パンセ』の「気晴らし divertissement」に関する一節を指していると考えられる[11]。ここにおいて、パスカルはもはや批判の対象ではなく、むしろボードレールと同じ立場の者として、現世における束の間の快楽に「気晴らし」を求める人々と対置するべく言及されている。

ボードレールの散文詩ではもう一篇、やはり 1862 年に発表された「午前一時に」という詩篇においても、パスカルへのオマージュが込められているとセリエは指摘する。その根拠の一つとして、詩篇の末尾において語り手が述べている一種の「神への祈祷」に、ボードレールが信仰に厚いパスカルに自らを重ねようとしている姿を見出すことが出来るのだと言う[12]。確かに、このような祈祷は詩篇の中のフィクションに留まらず、この時期のボードレールがカトリックの儀礼に即して実践していたものでもあることが当時の書簡から伺い知れる[13]。ちなみに、かつて牧神パンを讃える逸話を記していたボードレールが、この時期あたかもカトリックへの「回心 conversion」を行っているかのような様子を見せていた理由として、1861 年の初めに詩人を襲った精神的な危機や、深刻な体調不良を挙げることが出来るだろう。

また、これ以外にもパスカルとのつながりは詩篇のタイトルである「午前一時」にも隠されているとセリエは言う。

しかしながら何故に 1 時であり、2 時や 4 時ではないのか。それはこの詩篇の題名が「深淵」と同じように、パスカルへの紛れもない献辞をなしているからである。ボードレールはこのとき、アヴェ版において、パスカルの姉ジルベルトによる「パスカルの生涯」を再読したところであった。痙攣がパスカルを再び襲い、「それは彼の死まで続いた。すなわち 24 時間後の、1662 年 8 月 19 日午前 1 時、彼が 39 歳と 2 カ月の時であった。」それゆえに、詩人は彼の流儀で、1862 年の 8 月に、自分の兄弟とも言うべき作家の死後 200 年を祝ったのであった[14]。

10）*Le Spleen de Paris*, XXIII, « La Solitude », *OC* I, p. 314.
11）« (...) j'ai dit souvent que tout le malheur des hommes vient d'une seule chose, qui est de ne savoir pas demeurer en repos dans une chambre. » (*Pensées*, S168-L136.)
12）*Le Spleen de Paris*, X, « A une heure du matin », *OC* I, p. 288.
13）Cf. « Lettre à Madame Aupick, le 1er avril 1861 », *CPl* II, p. 140.
14）« Mais pourquoi une heure plutôt que deux, ou quatre ? C'est que ce titre, comme « Le gouffre », constitue une véritable dédicace à Pascal, dont Baudelaire venait de relire dans l'édition Havet la *Vie* due à sa sœur Gilberte : les convulsions le reprirent, « elles durèrent jusqu'à sa mort, qui fut vingt-quatre heures après, le dix-neuvième d'août 1662, *à une heure du matin*, âgé de trente-neuf ans deux mois ». Ainsi le poète a-t-il célébré à sa manière, en août 1862, le bicentenaire de la mort d'un écrivain-frère. » (Sellier, *op. cit.*, p. 8.)

ボードレールが「午前一時に」を発表した1862年8月27日は、パスカルの死後200年から僅か8日後に当たり、さらには詩篇のタイトルが、午前一時というパスカルの死亡時刻を表しているというのである。セリエの言うように、ボードレールが本当に詩篇の執筆時にジルベルトによる「パスカルの生涯」を読んだばかりであったのかは、証拠が不十分なために判断しようがないが、パスカルの死後200年周年を機運に当時パスカルへの関心が高まっていたことは事実であり、それが詩人としてのボードレールにもパスカルへの親近感を強めさせることになったという点に留めれば、妥当な推測であるように思われる。

そのような、1862年における詩人のパスカルへの関心を最も明示的に表しているのが、同年発表された韻文詩「深淵 Le Gouffre」である。

パスカルには深淵があり、それは彼とともに動いていた。
― なんと！　全てが深淵だ、― 行動も、欲望も、夢も、
言葉さえ！　そして、幾度も恐怖によって直立した
体毛のうえに、風が吹き抜けるのを私は感じた。（後略）[15]

詩篇の冒頭が「パスカル」という固有名詞から始まっている点からも、その関連性は明らかであるが、11行目にある「あらゆる窓をとおして私が見るのは、ただ無限だけ」という詩句もまた、『パンセ』の「これら無限の空間の永遠の沈黙が私を恐れさせる[16]」という一文を想起させる。ボードレールの詩学において、人間の有限性と無限への憧憬という対立は中心的な主題をなしているが、その葛藤の中で、最終的に信仰に答えを見出すのか、もしくはそれすらも拒絶するのかという点で、パスカルとボードレールの最大の違いがある。とはいえ、人間存在の受け入れ難い条件を前にして、気晴らしによってそこから眼を背けるのではなく、明晰な精神によって、その深淵を見極めようとする態度こそ、二人を結び付けるものであると言えよう[17]。

3. パスカルの「賭け」について

このようにしてボードレールは、特に1860年以降の精神的な危機の中でパスカルに対する親近感を強めていく。しかしながら、そのようにしてパスカルとボードレールを重ね合わせようとするほど、両者の違いはかえって明確になる。その

15）[*Les Fleurs du Mal* : Poèmes apportés par la troisième édition, 1868], «Le Gouffre», *OC* I, pp. 142-143.
16）«Le silence éternel de ces espaces infinis m'effraie.»（*Pensées*, S233-L201.）
17）この詩篇の一行目のパスカルとともに動いていた深淵というのは、おそらくアヴェ版の『パンセ』における解説の中に紹介されていた逸話を下敷きにしてのものと考えられている。（Cf. Sellier, p. 7.）しかしながらボードレールにおいて、このような深淵のテーマは単にパスカルの「深淵」に対するオマージュに留まらず、詩人の内面から必然的に現れてきたものでもあるだろう。ボードレールは「内面の日記」に「精神においても肉体と同じように、私は常に深淵の感覚を抱いている。今では私は常に眩暈を感じ、今日、1862年1月23日、私は一つの奇妙な警告を受けた。私は自分の上に愚かさの翼の風が吹くのを感じたのである」と記している。（*Hygiène*, [I], *OC* I, p. 668.）

一つが、有名なパスカルの「賭け」に対するボードレールの姿勢である[18]。

> 神に好意を寄せての計算。何事も目的なしには存在しない。ゆえに私の存在は目的を持つ。どのような目的か？私はそれを知らない。ゆえにそれを記したのは私ではない。それは私よりも賢い誰かである。その誰かに私を照らすよう祈る必要がある。それがもっとも賢明な方針である[19]。

この部分だけを取り上げて見た場合、ボードレールの言説にも、確率論を根拠として信仰による救済を正当化するパスカルの賭けの理屈に通じるところがあるかもしれないが、実際には、ボードレールがこれを書いたのは、神の存在をめぐる考察の中ではなく、自身のアカデミーへの立候補に反対する現職会員たちを非難する文章の中であり、アカデミー会員になることが叶わなかった状況に対する自嘲的な調子が込められているだろう。また、同じく「内面の日記」の中で、

> イエス＝キリストが「空腹なものは幸福である。なぜなら彼らは満腹になれるのだから」と言ったとき、イエス＝キリストは確率の計算を行っている[20]。

と記したとき、ボードレールは「確率の計算」という表現でパスカルを暗に示しつつ、その理屈をもって預言者イエス＝キリストの神性を切り崩すという、言ってしまえば揚げ足取りを行っているわけだが、ここにも明確に、パスカルの賭けの考えに対するボードレールの疑念が見てとれるだろう。

それ以外にも、パスカルにおける信仰を特徴づける「恩寵 Grâce」という神秘にボードレールが無縁であった点も、セリエ論文を引用しつつ確認しておこう。

> また同様に指摘しておく必要があるのは、ボードレールをジャンセニスムに引き寄せるということが、少しでもその教義における真の豊かさを認めたならば、どれほど馬鹿げたことかという点である。ジャンセニスト、とりわけパスカルは、カトリックの教義の中でも、恩寵、というキリスト教の神秘についてのアウグスティヌスの学説に対する熱心な擁護という点で他とは異なっている。自らのもとに見捨てられた人間という存在は、必然的に創造物の魅惑を受け、情熱により道を踏み外す。しかしながら、もしもキリストによる救済をもたらす恩寵が人を引き付け治癒するのであれば、それは恩寵がひそかに人の心に流れ、人を魅了、もしくは魔法をかけ、創造物の快楽を、もう一つの愛の歓喜によって、ついには乗り越えるのである。福音の厳格な

18）«Examinons donc ce point et disons : Dieu est ou il n'est pas. Mais de quel côté pencherons-nous ? La raison n'y peut rien déterminer. Il y a un chaos infini qui nous sépare. Il se joue un jeu à l'extrémité de cette distance infinie, où il arrivera croix ou pile. Que gagerez-vous ? Par raison vous ne pouvez faire ni l'un ni l'autre. Par raison vous ne pouvez défendre nul des deux.»（*Pensées*, S680-L418.）

19）*Mon cœur mis à nu*, III, *OC* I, p. 678.

20）*Mon cœur mis à nu*, XLI, *OC* I, p. 704.

> 実践は、並はずれた喜びという、パスカルのような人物が讃えることをやめなかったものと切り離せない関係にある[21]。

パスカルの信仰において重要である「恩寵」というものは、ボードレールの人生において、無縁であったと言えるだろう。そもそも啓蒙主義の申し子として、神秘主義的なものに否定的な態度をとっていたボードレールを、パスカル的な信仰に結び付けることは不可能である。

4. ボードレールの「想像力」論とパスカル

信仰の問題に重きを置いていたセリエ論文ではほとんど論じられていないが、本論において新たに指摘したいのが、セリエが注目した1862年より前の1859年から1861年にかけてボードレールが行ったパスカルへの言及の多くが、当時詩人が取り組んでいた最も重要な主題である「想像力」に関する議論と結び付けられているという点である。

その言及の一つは『1859年のサロン評』の中にあり、ボードレールは自らが信奉するドラクロワがその芸術的成功の割に民衆から不当に低い評価しか得ていないと主張する中で、パスカルの名前を挙げている。

> パスカルが言ったように、トーガ、緋色、羽根飾りは、真に尊重すべきものを俗衆に押し付けるため、ラベルによって印付けるために実にうまく考案されたものである。しかしながら、ドラクロワが受けた公的な栄誉の数々をもってしても、無知な人々が黙ることはなかった。だが物事をよく見れば、私のように、芸術に関する事柄が貴族的な人々の間でのみ扱われることを望み、そして選ばれた人間たちの希少性こそが天国を生み出すと信じる人々にとって、万事はこのような状態にして最善なのである[22]。

ここで言及されているパスカルの言葉というのは『パンセ』における「想像力」についての断章にある一節を指している[23]。『パンセ』においては、高位者が身にまとう衣装が、想像力が人間の理性を惑わす例として提示されているが、ボードレールは『1859年のサロン』において、想像力という能力を人間が持つ「諸能力

21）«Il importe aussi de marquer combien absurde est le rapprochement de Baudelaire avec le jansénisme, pour peu qu'on reconnaisse à cette doctrine sa richesse véritable. Les jansénistes, et en particulier Pascal, se sont distingués au sein du catholicisme par une défense acharnée de la théologie augustinienne de la Grâce, du mysticisme chrétien. Abandonné à lui-même, l'être humain subit infailliblement l'envoûtement des créatures, et ses passions l'égarent. Mais si la Grâce médicinale du Christ attire l'homme et le guérit, c'est parce qu'elle se coule insensiblement dans son cœur, le charme（au sens ancien）et parvient à surmonter la délectation des créatures par les délices d'un autre amour. La pratique rigoureuse de l'Evangile — d'où est née l'acception triviale de «jansénisme» — va de pair avec une joie intense, dont un Pascal n'a cessé d'être le célébrant.»（Sellier, *op. cit.*, pp. 12-13.）

22）*Salon de 1859*, *OC* II, p. 633.

23）*Pensées*, S78-L44.

の女王」として礼賛している。つまりここにおいても、ボードレールはパスカルの名前を持ちだすことで、想像力批判を行うパスカルとは明らかに異なる自身の思想の独自性を鮮明にしていると言えよう。

同種のパスカルへの言及は『人工楽園』の校正の際に、友人でもある出版者のプーレ・マラシに宛てて記した手紙の中にも見られる[24)]。フランス語の表記法をめぐり、現代的な「ce sont...」ではなく、より古風である「c'est des...」が適切であるとする根拠として、ボードレールはパスカルの名を引いている。また、「意志 volonté」というものを人間の一「器官 organe」とみなす表現にもマラシは異を唱え、最終稿ではこの「器官 organe」が「能力 faculté」に書き改められることになるのだが[25)]、この「意志は器官である」というのもパスカルの『パンセ』を意識してボードレールが記したものと考えられる[26)]。一見、ここでは、パスカルは批判の対象ではなく、むしろ正当なフランス語として評価されているように思われるが、この『人工楽園』では、阿片の作用により想像力を肥大化させて、一瞬の中に永遠を見出そうとする話であるため、やはり『パンセ』が主題とするキリスト教の擁護とは相反する内容であるだろう。両者に共通してみられる「意志とは器官である」という表現についても、『パンセ』では信仰を持つために意志という器官が重要であると述べているのに対して、ボードレールの『人工楽園』では、阿片の効果により、意志という器官が「損なわれた attaquée」と、状況が逆転している。

その翌年の 1861 年 6 月に発表されたヴィクトル・ユゴー論において再度、想像力に関連してパスカルへの言及が現れる。

> パスカルが禁欲主義に燃え上がり、以降はかたくなに、四方を裸の壁に囲まれて、藁の椅子のみで生きようとするとか、サン＝ロッシュのとある司祭が、どの司祭だったか覚えていないが、「快適さ」を好む高位聖職者たちから相当

24）«Vous avez raison. Strictement, la volonté n'est pas un *organe*. Et, cependant, j'avais voulu, par cette violation du langage, faire comprendre quelque chose. Si je disais que c'est un *fluide*, vous le supporteriez. Pourtant je me range à votre avis ; il ne faut pas taquiner les habitudes de l'esprit public. — De même, et pour la même raison, je me range à votre avis, relativement à : *ce sont*... au lieu de : *c'est des*... qui, quoi que vous en disiez, est d'une langue plus pure（Pascal, Bossuet, La Bruyère, Balzac, Honoré de Balzac, etc.）. / Nous avons ainsi des habitudes idiosyncrasiques, comme dit Champfleury, qui nous poussent à parler autrement que ceux de notre siècle.»（«Lettre à Poulet-Malassis, environ 20 avril 1860», *CPl* II, p. 26.）

25）«Mais le lendemain ! le terrible lendemain ! tous les organes relâchés, fatigués, les nerfs détendus, les titillantes envies de pleurer, l'impossibilité de s'appliquer à un travail suivi, vous enseignent cruellement que vous avez joué un jeu défendu. La hideuse nature, dépouillée de son illumination de la veille, ressemble aux mélancoliques débris d'une fête. La volonté surtout est attaquée, de toutes les facultés la plus précieuse [~~de tous les organes le plus précieux~~].On dit, et c'est presque vrai, que cette substance ne cause aucun mal physique, aucun mal grave, du moins. Mais peut-on affirmer qu'un homme incapable d'action, et propre seulement aux rêves, se porterait vraiment bien, quand même tous ses membres seraient en bon état ?»（*Les Paradis Artificiels*, *Le Poème du hachisch*, V, «Morale», *OC* I, pp. 437-438.）

26）«La volonté est un des principaux organes de la créance, non qu'elle forme la créance, mais parce que les choses sont vraies ou fausses selon la face par où on les regarde. La volonté qui se plaît à l'une plus qu'à l'autre empêche détourne l'esprit de considérer les qualités de celle qu'elle n'aime pas à voir, et ainsi l'esprit marchant d'une pièce avec la volonté s'arrête à regarder la face qu'elle aime et ainsi il en juge par ce qu'il y voit.»（*Pensées*, S458-L539.）

> な反感を買いつつ、全ての家具を競売場に送るだとかは良いだろう、それは立派で偉大なことだ。しかしながら、もしも一人の文学者が、貧困によって苛まれるでもなしに、眼にとっての喜びとなるものや想像力にとっての楽しみを軽視したりするのを見たならば、私はその人物が文学者として最低とまでは言わないが極めて不完全であると思わずにはいられないだろう[27]。

想像力こそが、人間が有する諸能力を司るべき女王であるとするボードレールにとって、パスカルの厳格な禁欲主義は相容れないものとなる。先ほどの『1859年のサロン』において既に現れていた、芸術家において最も重要な能力である想像力という論がここでも展開されているが、それを否定するのがパスカル、肯定するのが偉大な芸術家であるドラクロワ、ユゴー、そしてボードレール自身、という構図が見えてくるだろう[28]。

おわりに

ボードレールはパスカルのようにカトリックの信仰を抱きはしなかったものの、有限性の中で無限を渇望する人間のあり方を真摯に観察し、真実を追求しようとした点において、パスカルはボードレールにとって紛れもない先駆者であり、2世紀の時間に隔たれつつも、精神的な同胞として強く意識していたと言えるだろう。先行研究において、セリエは1862年におけるボードレールのパスカルへの関心の高まりを指摘しているが[29]、本論での考察の結果明らかになったのは、それ以前の1859年から1861年にかけて既にボードレールの中でパスカルへの関心が高まっていたという点である。おそらくそれは、詩人が「想像力」に関する理論構築を行う上で、信仰のために想像力に対して否定的な立場をとるパスカルとの差異化が、意識的に行われていたことを示していると考えられるだろう。

（神戸大学専任講師）

27）« Sur mes contemporains : Victor Hugo », *OC* II, p. 130.

28）この点に関しては、『1859年のサロン評』の詳細な注釈本をまとめたドロストも指摘している。Cf. Wolfgang Drost（éd.）, Baudelaire, *Salon de 1859*, Honoré Champion, 2006, p. 97.

29）本論では十分に紹介することができなかったが、セリエによると、パスカルのカトリック信仰と比較した際に見えてくるボードレールのカトリックとの関係についてもう一つ特徴的なのが、イエス＝キリストの不在という点である。セリエはこれをボードレールにおける「幼児期のキリスト教信仰の名残り le vestige d'un christianisme enfantin」と見なしている。（Sellier, *op. cit.*, p. 13.）